江牟田遺跡（えむたいせき）第１次発掘調査現地説明会

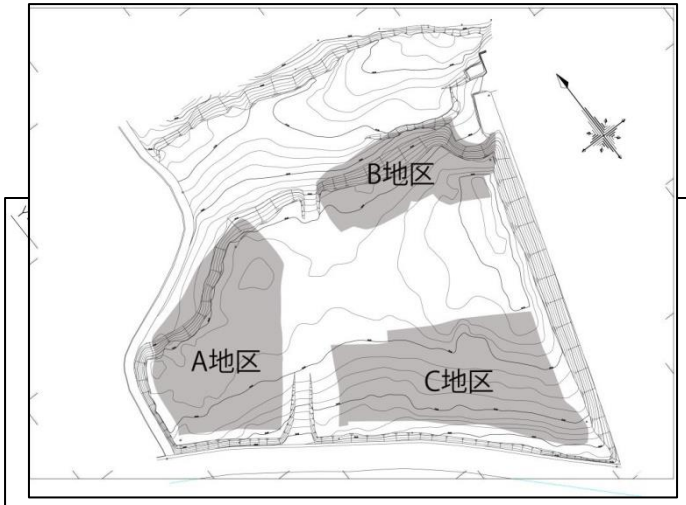
平成 26 年８月 24 日（日）
太宰府市教育委員会　文化財課

遺　跡　名：　江牟田遺跡（第１次調査）
所　在　地：　福岡県太宰府市梅ヶ丘１丁目 21 番地
立　　地　：　三郡山から派生する低い丘陵
時　　代　：　古墳時代後期（６世紀後半～７世紀代）
遺跡の性格：　古墳時代後期の集落跡
主な遺構　：　竪穴式住居、掘立柱建物跡
主な遺物　：　土師器（甕）、須恵器（蓋坏・甕）、石製品（紡錘車）

遺跡の概要：

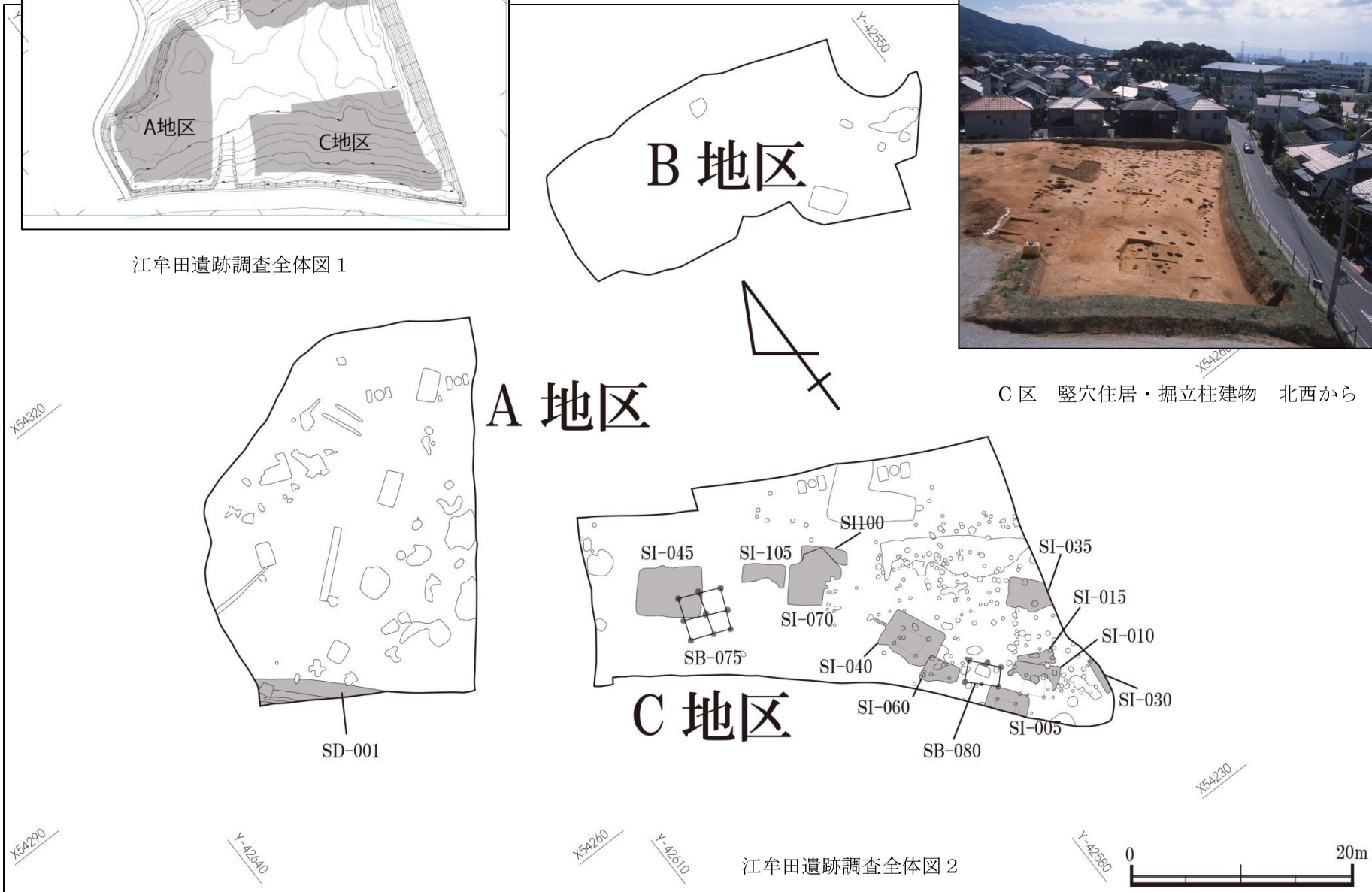
東から西へのびる標高 50ｍの丘陵南斜面に広がる古墳時代の集落跡です。主に調査地内の南東側に集中して竪穴住居や掘立柱建物、柱穴等を確認しています。また、調査地の西側では、道路の側溝と考えられる溝を確認しています。

江牟田遺跡位置図（S=1/5000）



江牟田遺跡調査全体図１

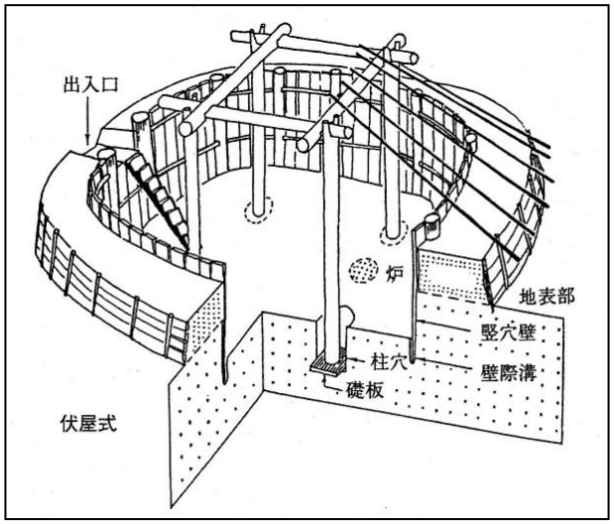
C 区　竪穴住居・掘立柱建物　北西から



江牟田遺跡調査全体図２

竪穴住居

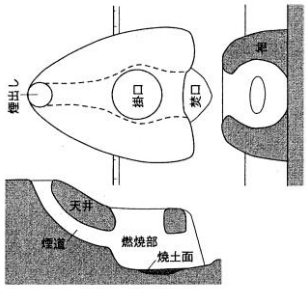
建て替えを含めて 11 棟の住居を確認しています。規模は大きいもの（SI045）で縦約６ｍ、横４ｍ以上、小さいもの（SI015）で縦約３ｍ、横１ｍ以上と大きさは様々です。住居の内部には竈（かまど）が造り付けているものがあり、中には煙を外に排出するための煙道（えんどう）がつくものもみられます。そのほか、屋根をかけるための柱穴や、板を壁に取り付ける際に壁際に沿って作られた溝（壁溝（へきこう））が確認できます。また、いくつかの竪穴住居は重なって確認でき、同じ場所に繰り返して生活していたようです。



竪穴式住居復元図（2010 奈良文化財研究所『発掘調査の手引き』より転載）

竪穴住居（SI015）南西から

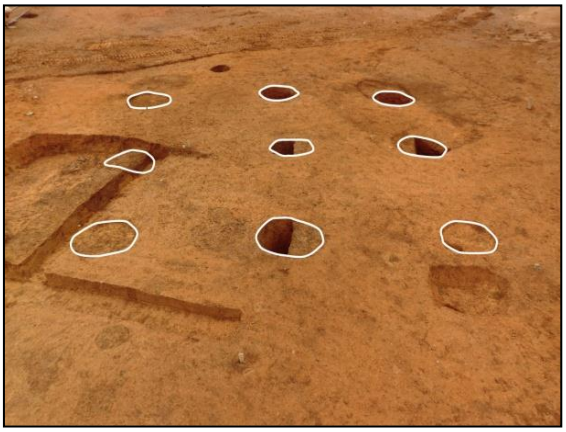
竈（かまど）（SI060）東から



竈復元図
（2010 奈良文化財研究所

掘立柱建物

２棟確認しています。SB075 は東西２間（約２ｍ）南北２間（約２ｍ）の建物で、直径約 0.5ｍの柱穴が９本並ぶ総柱建物です。SB080 は東西２間（約３ｍ）、南北１間（約１ｍ）の掘立柱建物です。いくつかの柱穴（ちゅうけつ）には、径約 20 ㎝の柱の痕跡を確認しています。調査の結果、どちらも竪穴住居の廃絶後に建てられていることがわかりました。



掘立柱建物（SB075）西から

掘立柱建物（SB080）南西から

溝

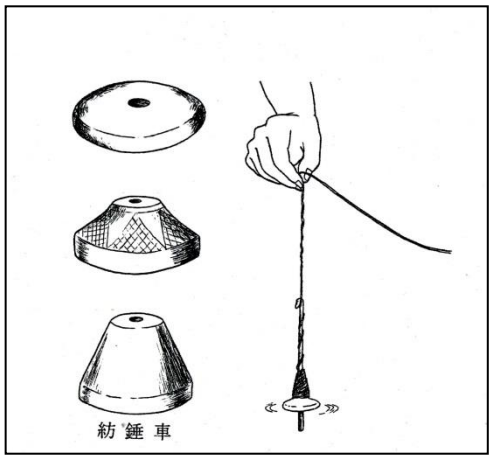
調査地西端で確認した南東 - 北西方向に伸びる溝です。調査地周辺は古代の道路推定ラインに近い場所で、溝がのびる方向が推定ラインと同じであることがわかりました。遺物が出土していないため詳しい時期はわかりませんが、道路に関連する遺構の可能性があります。

遺物

主に土師器の甕(かめ)や甑(こしき)、須恵器の坏(つき)と甕が出土しています。また、数は少ないですが高坏(たかつき)や提瓶(ていへい)といった種類も確認しています。そのほか糸を紡(つむ)ぐ道具である石製の紡錘車(ぼうすいしゃ)が出土しています。

高坏

紡錘車



紡錘車使用図（潮見浩 1988『図解技術の考古学』より転載）『発掘調査の手引き』より転載）

まとめ

調査の結果、江牟田遺跡は古墳時代後期の集落跡であることがわかりました。当遺跡周辺については、これまで発掘調査により、同時代の集落遺跡（大曲り遺跡、野黒坂遺跡）が確認されています。今回の調査で当地丘陵も含め古墳時代の集落の広がりを確認することができました。

また、調査の南側の道路は古代官道の跡として推定されています。今後、周辺の調査例が増えていけば、今回確認している遺構も、官道の関連遺構として位置づけて行くことが可能かも知れません。